

第1章 めざすもの



全国的に「子どもの読書ばなれ」の傾向が進んでいます。その背景には、近年のテレビ、携帯電話、インターネット、テレビゲームなどの情報メディアの著しい発達、普及による子どもたちの生活環境の大きな変化が見られます。これらの影響として、子どもたちの自制・自律機能の低下や短絡的な思考なども指摘されているところです。

読書は、テレビのように一方的に情報を受け入れるのではなく、自分で考えて言葉や行の「すきま」をうめ、本の世界を心の中に描かねばなりません。

「このお菓子はどんなに甘い味がするんだろう。」「この子はいったいどんな気持ちになったんだろう。」など、子どもたちは楽しみながら、言葉を学び、感性を磨き、想像力を豊かなものにしていきます。

変化の激しいこれからの社会の中では、自ら学び、自ら考え、主体的に判断する力や豊かな人間性などの「生きる力」が必要です。子どもの頃からの読書習慣の形成は、「生きる力」を育てていく有効な手段の一つだと考えます。

また、読書は人との出会いに似ています。すばらしい人と出会い、そのすばらしさに感動すれば、さらに多くの出会いを求めます。すばらしい本と出会い、読書の楽しさや知識欲を満たす喜びを得ることで、人生を豊かなものにするでしょう。

池田市内では、そのような出会いの場を充実するため、公共図書館（市立図書館・石橋プラザ）でのおはなし会、学校における一斉読書、地域ボランティアによる文庫活動など、子どもの読書活動に係わる様々な取り組みが行われています。

本来、読書は自由で自主的な個人的な営みです。この計画は制度をつくって無理やりに子どもに本を読ませようとするものではありません。これから成長し、社会を担っていく子どもたち自身が本のおもしろさ、楽しさを自ら発見していくためには、すばらしい本と出会うことが必要であり、そのためのより良い読書環境を創っていかうとするものです。

公共図書館や学校図書館の整備・充実、読書活動推進のための様々な組織間の連携、家庭への啓発や地域ボランティア団体との協働、これらに対する支援など、今後一層推進していく必要があると考えています。